

敗戦の年

桜田 北斗

昭和二十年三月十二日、私は千葉から東京へ行く電車に乗っていた。

学童疎開先から中学受験のためである。ところが、電車は平井止まりであった。

三月九日から十日にかけての東京大空襲の被害で、その先の運行が不可能になっていた。
平井駅で降ろされた。

そこから母の居る小石川か祖母の住む滝野川へ行かねばならない。

どうしたらよいのか途方にくれた。いずれにしても歩かなければならない。おとなの人に尋ねながら、その方向に行く人の群れについて歩いた。

どのくらい歩いたのだろうか、見渡すかぎりの焼け野原に出た。

家屋や建物が焼け落ちていて灰塵に帰したもののもあれば、未だ地面際であちこちに小さな火が燐り、細い煙が出ているところもあった。

更に目を凝らすと、黒焦げになった死体がところどころにころがっていた。

そこから出てきたものか、油のような液体が道路の端の溝にたまり、その上を火が走り、ちよろちよろと蠟燭の灯のように小さくゆれていた。

兵隊さんたちが懸命に黒焦げ死体をトラックに積んでいたが、いま考えれば鳶職人の鳶口だったのだろうか。その鉤を死体の顎骨などに引っ掛け、一箇所に移動したり、トラックに積んだりしていた。後で聞いたことだが、遺体は上野公園などに運ばれ埋葬されたそうである。

焼け跡には、生き残って立ちすくむ人、跪いている人、棒状のもので灰塵をほじくっている人も居た。顔は燐された煤色で、なかには、兵隊さんにもらったのか、握り飯をむさぼっている人も居た。その握り飯が奇妙に白く映えていたのを覚えている。

悪臭と、何だかいうにいわれぬ空気が充満していて、逃げ出したい気持ちに駆られたが、おとなの人についていかなければ帰れない。

ひたすらその人たちの背中を見ながら歩き続けた。

橋を渡ることになった。ちょっと立ち止まり、川に目をやると、水死体は何体も浮かんでいた。お巡りさんが顎紐をつけたままで帽子をかぶり、サーベルもつけたままで浮かんでいた。子供も、赤ん坊を背負った女の人も、寝巻姿の男の人なども浮かんでいた。それらの水死体が水面をほぼ覆い、下流への水の流れに静かに動き、揺れていた。

火災に追われ、逃げ場を失い飛び込んだのだろう。

その日、本所、深川、浅草などを歩いたのだろう。川は隅田川だったに違いない。
小石川か滝野川のどちらかにたどり着いたのだが、記憶から消えている。

その日の強烈な印象が酷く悲惨だったが故に、その記憶を無意識に忘却に迫いやりたいのか、思いだそうとしても繋がらず、時々、個々の場面が映ってくる。

後日、浅草で焼け出された何人かと中学の同級生になったが、そのうちの一人で、隅田川近くの今戸のお寺さんの子（今は住職）がいた。彼の家も三月九日の大空襲に遭い、幼い妹さん二人も亡くされたそうである。

お母さんは気も狂わんばかりに嘆き悲しみ、心痛のためか、間もなく髪が真っ白になったと聞かされたことがある。逆に一家が全滅してしまい子供だけが助かり、戦災孤児になったとか、一家離散とかの悲惨な話は枚挙にいとまがない。

戦後間もなく、GI（占領軍米兵）を相手に、靴磨きをしていた子供たちやガード下の女性たち、身内も、ねぐらも失くして、あてどなく盛り場をうろつく浮浪者たち、彼らの多くは戦災で不幸の境遇に落とされた人々だった。

それから間もなく中学生になった。時局がら、家から徒歩通学できる中学が良いということになり、私立 K 学園中学校へ入学した。制服は既にスフのペナペナのものしかなく、それも抽選で配給されることになっていた。それでも、抽選に当たり、東京に戻ってきて中学生になったしるしを着ることは嬉しかった。

学校の授業で敗戦までに受けたのは、論語の読み下しと、代数の因数分解ぐらいだったことを覚えている。学校には陸軍の見習い士官が配属されていて、生徒はよく校庭に整列させられ、鬼畜米英撃滅とか、少国民の心得とかの講演を聞かされた。時には木刀とか竹槍で藁人形を相手に訓練をさせられた。些細なことでピンタをくらうこともあった。

その頃の上級生は軍需工場へ駆り出されて作業の手伝いをさせられていたが、本土決戦が声高に叫ばれるようになると、われわれ一年生も何かお国のために尽くせということになったのだろう。

陸軍のトラックが学校にきて、それに乗せられ、小石川白山下から杉並永福町の現場まで運ばれ、そこで一日防空壕の穴掘り作業に従事させられたのである。時間がくると野外のドラム缶の風呂の前に並ばされ、順番にその風呂にちょこっと入り、すぐ出て体を洗い、お湯で流して交代する、鳥の行水のせわしさだった。それからトラックで学校に戻され、監督の兵隊さんから饅頭を一、二個もらい、解散する日課が何日か続いた。誰しもそうだったと思うが、都会育ちの十二、三才の少年が一日中穴掘りをする、筋肉とか節々が痛くなり、辛い勤労奉仕だった。それでも友達と会いたくて休まなかった。

強制立ち退きの家の撤去作業もやらせられた。兵隊さんが家の柱に太い綱を結び付け、われわれが兵隊さんの掛け声に従って引き倒すのである。家が崩壊するときはすごい塵埃が飛び散り、音響も大きかった。最初は面白かったが、そのうち何だか変だなあと思うようになった。

たまに学校での授業があっても、戦局が厳しくなり、同級生のなかでも罹災して途中から来なくなる生徒が増え、先生も生徒もあまり勉強に身が入らないようだった。

子供の頃、八才年上の、当時中学生だった叔父が英語リーダーを読んできたことがあったので、中学生になると英語を習えると思っていたが、英語は敵国の言葉なので、すでに一切学んではいけないことになっていた。

それでいて、世界中が一家のように仲良くしようという理念の八紘一宇の精神とかは教えられたと思う。

われわれの年代をふりかえると、戦争そして戦後混乱期の学校教育でまともに学んだことは少なかったと思う。社会に出て間もなく、明治、大正前期生まれの先輩と較べて昭和一桁生まれのわれわれは、素養の点で劣るのではないかと感じた。

敵機襲来は日を迫って頻繁になり、罹災の範囲も広がっていた。四月十四日に滝野川の祖母の家が、五月二十四日に小石川のわが家が焼かれた。

祖母の家が焼かれたときには、母が作ったおにぎりなどを入れたリックサックを背負って祖母の家の焼け跡近くへ歩いていった。まだ燻っていたが、三月十二日に見た酷く悲惨な状態ではなかったので、少しはほっとした。

三月九、十日の本所、深川、浅草の場合には焼夷弾を広範囲に、それも環状に落とし、それから内部に向かって、絨毯を敷きつめるように隙間無く焼夷弾を落下したと聞く。

正に皆殺しの戦術であった。当日は猛烈な空っ風が吹いていたそうで、火炎が更に勢いを得て猛威を奮い、しかも退路は断たれていた。ひっきりなしに猛火で焼かれ苦しむ地獄、阿鼻叫喚の巷の現出だったのだろう。

祖母と母の末弟の叔父が見当たらない。多くの罹災者が、省線（JR）の田端と上中里の間の線路軌道や、その近くに避難していると聞いたので、その方をさがして歩いた。長い距離にわたって人々があちらこちらに群がって居た。

やっと持ち運んだ荷物だろう、風呂敷包み、鞆類、引き出し、布団なども散乱していた。荷物の上に座っている人、防空頭巾を枕に地べたに寝そべっている人も見受けられた。運良く叔父と祖母が私を見つけて叫んだので、二人が無事であることがわかった。

祖母の乱れた髪、二人の疲れ切った様子、煤の残る顔を見たら思わず目頭が熱くなった。

二人は喜んで握り飯と糠漬けのお新香を食べながら、B29の焼夷弾がどこへ落ちるかの恐怖とか、類焼だったから命だけは助かったとか、これからは祖父が一足さきに疎開している母の姉が居る埼玉の久喜で暮らすとか、この空襲が二日後だったら、既に梱包してあった五十個あまりの家財を、母のすぐ下の弟がトラックで取りにきて、久喜へ疎開させて無事だったのにと云っていたのを覚えている。

わが家が焼かれた時のこと。警戒警報が鳴ったので、枕許の脚絆（ゲートル）を巻き、リックサックの中に教科書、帳面、筆入れ、字引などの学用品を入れ、その上には衣類、靴等をつめて背負い、学帽の上から防空頭巾をかぶり、何時でも外へ飛び出せるようにしていた。

空襲警報が鳴って間もなく B29 が空高く襲来し、焼夷弾を投下し始めた。視界に入るあたりで火柱が上がり、母と一緒におもてへ出て、近くの空き地へ逃げる人々の群れに加わったが、途中から人の数がどんどん増え、道は身動きもできない状態になった。それでもどうにか高台の原っぱに抜け出すことができた。

わが家の焼け落ちる状態は見えなかったが、前の後樂園球場に配備されていた高射砲陣地から撃つ砲弾が B29 の高度にとどかず、そのまま落下するのはよく見えた。

B29 が去り、そのうち警報が解除された。すると、大勢の人たちが同じ方向をめざして駆けだした。何だろうと思い後をついて行くと、爆撃をうけて炎上しつつあった煙草専売公社の施設に着いた。そこで大人たちは、まだ火がまわらない煙草を夢中でかき集め、かぶっていた鉄兜をぬいで、その中へ煙草を入れて逃げるのであった。

そのうち突然、銃を手にして、憲兵の腕章をつけた兵隊さんが現れ、「戦時経済統制令違反」だとか云って、逃げおくれた人たちに煙草を捨てさせた。

燦る膨大な量のタバコの煙は風に追われて流れていく。男たちは風下の丘で深呼吸する。あの一服の味わいは一体何だったのだろうか。

帝都東京は B29 を主力とする敵機による空襲を、昭和十九年十一月二十四日から昭和二十年八月十五日までの八カ月余りの間に、延べ百三十回も受けたそうである。その被害は死者数約十一万五千人、負傷者約十五万人、戦災者約三百十万人、焼失家屋約八十五万戸だったとある。

この事実は決して忘れてはいけないことだと思う。

昭和二十年の天長節、昭和天皇の誕生日四月二十九日、天皇は四十四才になられたが、その前日、日独伊三国同盟のイタリアのムッソリーニは自国民に処刑され、宙吊りに晒された。その翌日ドイツのヒトラーは自決した。大東亜（太平洋）戦争では六月二十三日に沖縄は陥落し、八月六日には広島に原爆が投下され、その二日後にはソ連が参戦して、その翌日には長崎にも原爆が落とされた。手もとの年表をめくるとこのようになる。

この年に、東京ではイノセントな、邪悪を識らない市井の人々が、無惨にも酷くこの世の地獄へ落とされていったのである。

その夏、狂乱と虐殺の終結と、領土の奪い合いが、ポツダムで練られていたのである。

私は四年ほど前に、シェイクスピアのハムレットで有名なデンマークのクロンボー城を見に行った帰りにベルリン経由で、当時の連合国の首脳たちが会談したポツダムの会議場（記念博物館）に寄ってみた。

額縁に納まったスターリン、トルーマン、チャーチルたちの肖像画や写真、会議した卓、座った椅子、種々の書類の展示があったのをながめた。ここで、昭和二十年七月十七日、彼ら巨頭が、同年五月七日無条件降伏したドイツの処遇について、国境の画定、賠償などを協議し、それから十日後の七月二十六日、日本に無条件降伏を呼びかけるポツダム宣言を発表している。戦争末期と、冷たい戦争を含む戦後の多くの国の人々の運命を左右したのが、ここでの協定とか宣言だったのかと思うと複雑な感懐だった。一方、昔のことで、ぼんやりしている往事渺茫の言葉も浮かんでいた。外国人の参観者たちも、胸中はわからないが、話し声もなく、ただぶらぶらしている様子だった。その後で、近くの元 KGB（ソ連国家保安委員会）の東ドイツ駐留事務所へ行くと、参観の外国人の動きが活発で、話し声も多かった。ソ連が消滅し、近年、ベルリンの壁もなくなり、ドイツは統一国家になり、KGB が退去したのでその古巣を覗く興味があったのだろう。

戦後間もなくは、日本も分断国家にさせられる噂はあった。ソ連が北海道を、アメリカが本州を、どこかが四国を、イギリスが九州を占領するとかの風聞である。

日本は莫大な数の兵士、民間人が戦場、外地で亡くなり、沖縄は戦場になり、広島、長崎には原爆が投下され、東京には大空襲があり、他の日本各地も空爆の被害をうけ、戦禍は著しく、無惨なものだったが、分断されることだけは免れた。さもなくば、さらに分断国家の不幸に喘いでいたかも知れない。

その日は八月十五日だった。夏休みだったと思うが、何かの用で学校に出ていた。下校の途中、市電に乗って間もなく、柳町か八千代町あたりで降ろされた。正午十二時に天皇陛下の重大なお言葉が放送されるからだ。

道路に面した町会の事務所だったと思う。そこのラジオからの玉音は、少し甲高い、澄んだ女性的な声だった。しかし雑音が多く、聞き取りづらかった。「堪え難きを堪え、忍び難きを忍…」などが、どうにか判った程度だった。

誰かが「戦争は負けたんだ。ポツダム宣言を受諾したんだ」と叫んだ。

そこから水道橋を通り神保町まで歩いた。街には人影がまばらだった。

昭和十六年十二月八日の宣戦布告の大本営発表が頭をよぎる。三年八カ月だったのか。

小学生の頃、アッツ島（山崎部隊長以下全員玉砕）についての綴方を書かされたことを思い出したり、本所、深川、浅草の焼け跡、隅田川、祖母や叔父の罹災、母との避難なども目に浮かぶ。結局負けたんだ。すべてが空になった気持ちでいっぱいになった。

「これからどうなるんだろう」と考え、「これからどうしたらいいんだ」と呟くうちに、神保町の交差点に出ていた。

私にとって昭和二十年、一九四五年は敗戦の年であって終戦の年ではない。

戦争が「終わった」という時間の区切りの響きでは、未来志向が皮相的になるのではない。戦争に「敗けた」というと、屈辱もあるが、負けに到る過程の酷さ、悲惨さ、更に勝っても負けても、戦争はこの世に地獄を現出するものとの確信を持ち続けさせるのであって、この確信が純粋な反戦に繋がり、目撃した本所、深川、浅草で犠牲になられた人々、そして、その他大勢の戦争犠牲者に捧げる鎮魂の祈りになるのではないか。